

教育研究業績書

| | | | |
|---------|-----|-------|---------|
| 所属 | 職名 | 氏名 | 学位 |
| こども教育学部 | 准教授 | 安村由希子 | 保健医療学博士 |

| I 教育活動 | | |
|---|-------------|---|
| 教育実践上の主な業績 | 年 月 日 | 概 要 |
| (1)教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) 絵本の読み聞かせ、ペープサート、手遊び、紙芝居の実践 | 令和1年度 | 言葉の指導法」の授業にて、ペープサート、紙芝居、手遊びを取り上げた。そして、14回目の授業では学生をこども園(附属園)に連れてきて、子ども達の前で実演させた。学生の総数は約150名、子ども達は100名程度であり、グループごとに4回に分けて行った。実演後、学生にアンケートを取ったら、子どもの前で実演することで、子どもの注意のひきつけ方、子どもの座らせ方、実演者の良い立ち位置、お話を理解してもらうための効果的な話のスピードといったことを学ぶことが出来たようであった。また、実習に生かしていきたいという意見も多くあった。 |
| (2)作成した教科書・教材・参考書 ①保育内容「言葉」指導法 | 平成30年3月15日 | 第5章「書き言葉の発達と保育」の項では、子どもが文字を習得するために必要な力を提示した。それは主に3点あり、一つ目は「音韻意識」、二つ目は「シンボルを理解する力」、三つ目は「視覚的識別能力」であり、この章では特に音韻意識に着目し詳細に叙述した。そして、音韻意識が欠如した結果起こる症状や障害、幼児期における支援方法などを具体的な遊びとして提示した。最後に「幼稚園教育要領」に添って、子どもの文字に対する興味や関心を育てる方法について、実例をもとに詳しく述べた。第5章「書き言葉の発達と保育」担当。 |
| ②保育・幼児教育5領域の内容と指導法 | 平成30年11月20日 | この章ではまず言葉の意義について説明を行った。言葉の役割は主に6つあり、言語がコミュニケーションの手段としてだけでなく考える思考の手段になったり、自己コントロールの手段になることを示した。また、子どもの言葉を育む方法としてインリアル法に着目し、保育者が日常の保育の中でどのように子どもと関わり、言葉を育てていったらよいのかといったことについても、7つの技法を基に解説を行った。その他、小学校に入ってから読み書きの基礎となる音韻意識の力についても説明をし、音韻意識を育てる言葉遊びや絵本を紹介した。また、文字への興味関心を育てるための環境づくりの方法を提示した。第6章「言葉の内容と指導法」担当。 |
| (3)教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| (4)その他教育活動上特記すべき事項 | | |

| II 研究活動 | | | | | |
|-----------|---------|------------|----------------------|-------------------|------|
| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月 | 発行所、発表雑誌(及び巻、号数)等の名称 | 編者・著者名(共著の場合のみ記入) | 該当頁数 |
| (著書) | | | | | |

| | | | | | |
|-------------------------------|----|----------|-------------------------|----------------------|--------|
| 保育内容「言葉」指導法 | 共著 | 平成30年3月 | ミネルヴァ書房 | 小倉直子、馬見塚昭久 | 86-100 |
| 保育・幼児教育5領域の内容と指導法 | 共著 | 平成30年11月 | 学文社 | 柴田賢一、森みゆき | 55-67 |
| | | | | | |
| (論文) | | | | | |
| かなの習得に躓きを示す幼児の聴覚処理能力 | 単著 | 平成22年1月 | 日本発達障害支援システム学研究、第9巻、第1号 | | 25-30 |
| 読み書き障害児に対するトップダウン式指導法 | 共著 | 平成22年8月 | 日本コミュニケーション障害学27巻2号 | 浦由希子、遠藤重典、田中裕美子 | 87-94 |
| (その他) | | | | | |
| 「ここまでわかった言語発達障害(Understanding | 共著 | 平成23年3月 | 医歯薬出版株式会社 | 田中裕美子、入山満恵子、遠藤重典、鬼塚祥 | 95-107 |
| | | | | | |
| | | | | | |

Ⅲ 学会等及び社会における主な活動

| | |
|-----------------|--|
| LD学会 | |
| 日本コミュニケーション障害学会 | |
| 発達障害支援システム学会 | |